

## I 論文

# 『雨月物語』『吉備津の釜』に見られる両義性の基盤

## —語りが直接的に提示する物語と「磯良」の視覚的印象

大 橋 敦

### 1. はじめに

「私たちが何よりもまず読むべきは「古典」である」。前号の巻頭エッセーでそう田口卓臣は述べている（田口 2014：5）。古典の解釈に取り組む人間にとって、勇気づけられる発言である。さらにこのエッセーでは、古典を読むことについて、〈今、ここ〉にはいない人々とともに考えることだという魅力的な考えが示されている。この見方によれば、古典を読むという行為それ自体が多文化共生の問題と密接にかかわっているのである。本論文ではこのエッセーに応え、古典のテキストをとりあげ具体的に読み解いていくことにしたい。

とりあげるのは江戸時代の怪異小説集、上田秋成『雨月物語』（1776 年刊）に収録される「吉備津の釜」である。「吉備津の釜」は一言でいえば、妻を裏切って別の女性と駆け落ちした男が、怨霊となった妻に殺されてしまう、という物語である。この短篇は夫婦のあいだに見られるすれ違いを怪異小説として描いている。とくに怨霊となった妻が夫をとり殺す場面については優れた怪異描写が評価され、『雨月物語』のなかでもっとも知られている短篇だろう。

この短篇の特徴は両義的な語りによって、ある出来事には複数の捉え方がありうることを巧みに表現してみせているところである。そのため読者は、複雑なもの、異質なものを単純化、同化しようという人間の心の働きと向き合わざるをえない。複雑なものを複雑なまま、異質なものを異質なまま受け入れることができたときに、はじめて上田秋成という〈今、ここ〉にはいない作者とともに考えることができるのであ

る。この作品が読者に要求していることは、多文化共生社会に生きる人間にとって必要な資質と重なる部分が大きいと考えられる。多文化共生というテーマから見ても、「吉備津の釜」は「何よりもまず読むべき」古典だといえるのではないだろうか。

この短篇については、さまざまな点で両義性が見られることが指摘されている。わかりやすい例を紹介すれば、妻は美人なのに容姿の醜さを喚起させる名前をつけられている（清田 1970）。また、妻の怨霊から夫の身を守るために陰陽師が講じた対策は怨霊によって破られてしまったのに、陰陽師の占いがあたったことが締めくくりで称賛されている（風間 2011：261-64）。

このような両義性は作品内で個別的に見られるというよりも、相互に関連しあって作品全体の捉え方を両義的にしていると考えられる。すなわち、この短篇には語りが直接的に捉え方を提示する物語のほかに、もう一つの物語が見られるのではないだろうか<sup>1</sup>。

そこでこの論文では、「吉備津の釜」に見られる二つの物語について考察するために必要な手続きのうち、次の二つを行うことにしたい。一つ目は語りが直接的に提示する物語がどんなものか明らかにすることである。二つ目は妻に与えられた「磯良」という名前が見られる江戸

1 語りが直接的に提示する物語とは別に、もう一つの物語が見られるという指摘はすでに木越（1998）が行っている。ただし、木越は語りが直接的に提示する物語についてはほとんど論じておらず、もっぱらもう一つの物語について考察している。

期の文芸テキストをとりあげて、磯良という名前が与える視覚的印象を探ることである。どちらもこの作品の両義性を形成する重要な二つの要素であり、これから「吉備津の釜」を論じていくための基礎的な作業と位置づけられるからである。

## 2. 語りが直接的に提示する物語

『雨月物語』の短篇では、読者に対して、語りが物語の捉え方を直接的に提示するために、主に次の二とおりの手法が用いられている。

- (1) 物語世界の出来事を語りだす前に、出来事に関連する情報を与え、読者の注意を向ける。
- (2) 締めくくりで物語についての意味づけを行う。

(1) はいわゆる「まくら」である。この短篇でも物語世界の出来事が語り出される前に、男女の関係について情報が提示される。そのあとに男女の物語が続くので、読者はその情報に基づいて物語世界を捉えることになる。そこでまず冒頭の文章に書かれている情報を整理しておくことにしたい。

とふやしなおい  
 妬婦の養ひがたきも、老ての後其功を知る  
 と。咨これ何人の語ぞや。害ひの甚しから  
 ぬも商工を妨げ物を破りて、垣の隣の口を  
 ふせぎがたく、害ひの大なるにおよびて  
 は、家を失ひ国をほろぼして、天が下に笑  
 を伝ふ。いにしへより此毒にあたる人幾許  
 といふ事をしらず。死て鱗となり、或は  
 霹靂を震ふて怨を報ふ類は、其肉を醢に  
 するとも飽べからず。さるためしは希なり。  
 夫のおのれをよく脩めて教へなば、此  
 患おのづから避べきものを、只かりそめ  
 なる徒ことに、女の慳しき性を募らしめ  
 て、其身の憂をもとむるにぞありける。禽  
 を制するは氣にあり。婦を制するは其夫の  
 雄々しきにありといふは、現にさることぞ

かし<sup>2</sup>。

まず文章の流れとしては、前半では嫉妬深い女性の害が強調される。次に後半では嫉妬深い妻に夫の側がどう対処すればよいかが述べられる。そして最後に教訓が提示される。提示された情報を箇条書きの形でまとめると次のようになる。

- (3) 嫉妬深い妻は恐ろしい。
- (4) 夫が自分の身を修めて妻を導けば、嫉妬の害は防げる。反対に夫がちよっとした浮気ごとをしてしまうと、女の「慳しき性」(ねじけた性質)を刺戟してしまい、自分の身が危うくなる。
- (5) 妻を抑え制するためには、夫が男らしくなければならない。

次に(2)について考えよう。(2)は末尾に位置する物語のしめくくり表現である。『雨月物語』の短篇では、物語世界で出来事がどのように語り伝えられたか述べることで、読者に物語の捉え方を直接提示することが多い<sup>3</sup>。「吉備津の釜」もそうである。

此事井沢が家へもいひおくりぬれば、涙ながらに香央にも告しらせぬ。されば陰陽師が占のいちじるき、御釜の凶祥もはたたがはざりけるぞ、いともたふとかりけるとかたり伝へけり。

まず夫である正太郎の最期がどのような経緯で伝えられたかが示される。そのうえでこの出来事がどのように語り伝えられたかが述べられている。物語の意味づけは二文目で行われている。内容としては陰陽師の占いと御釜祓いを称え、霊験あらたかな物語として捉えるように読者を誘導しているのである。したがって物語の意味づけは次のようにまとめられる。

- (6) 陰陽師の占いが的中した物語。

2 『雨月物語』は中村ほか(1990)から引用した。

3 他には語り手が自分の考えを述べ、物語の意味づけを行う場合がある。

## (7) 御釜祓いの凶兆が実現した物語。

それでは次に冒頭と末尾に示された捉え方にしたがって、物語を捉えることにしよう。物語内では、夫の正太郎が遊女の袖と浮気をしたせいで、妻の磯良が嫉妬を募らせ、生霊となって袖を殺すだけでなく、死後も怨霊となり、最終的に夫を殺してしまう。この一連の出来事は、嫉妬深い妻に焦点を当てる(3)にしたがえば、磯良は嫉妬深い妻で、恐ろしい嫉妬の害が発揮されてしまったと捉えることができる。袖の死の場面で六条御息所のイメージが重なるようにしているのも、磯良を「妬婦」として捉えさせるための工夫だろう。

次に夫のふるまいと妻の嫉妬の関係に焦点を当てる(4)にしたがって物語を捉えよう。夫の正太郎は遊女の袖と浮気をするだけではなく、妻をだまして駆け落ちまでしてしまうので、それまで夫とその両親にもよく仕えていた素晴らしい妻だった磯良でさえ「慥しき性」を刺戟されてしまった。そのために正太郎は自身身の憂いを招き妻に殺された。正太郎があまりにもひどい仕打ちを妻に対してしてしまったから、たぐいまれな「霹靂を震ふて怨を報ふ類」の嫉妬の害を受けることになってしまったと捉えることができる。

さらに夫の男らしさに焦点を当てる(5)にしたがって物語を捉えよう。御釜祓いで凶兆がでってしまったのに、結婚をやめることができなかったのは、磯良の実家香央家で父の神酒が、娘の結婚を強行しようとする妻に押し切られてしまったからである。これは夫が男らしくなかったため、妻を制することができず、尊い御釜祓いの結果を受け入れることができなかったと捉えられる。そのために(7)「御釜祓いの凶兆が実現した物語」になってしまった。ここで冒頭と末尾が結びつき、香央神酒に男らしさが欠如していたため、凶兆が実現したのであり、そのことを占いは予見していたということにな

る。

夫の男らしさに焦点を当てる(5)と(6)「陰陽師の占いが的中した物語」も同じように結びつく。正太郎は陰陽師に嚴重に物忌みをするように指示されたのにもかかわらず、物忌みの期間が明ける前に外に出てしまい、妻に殺されてしまう。これは夫に男らしさが欠如していたため、妻を制することができなかったと捉えることができるだろう。陰陽師の占いはそのことを予見していたのだということになる。

以上のように冒頭と末尾の表現から、語りが直接的に提示する物語を捉えることができた。秋成は冒頭や末尾の表現と対応するように、周到に物語を構成していることがわかる。正太郎は浮気心を起こして、磯良の「慥しき性」を募らせてしまった。さらに男らしくもなかったため、陰陽師の警告もむなしく、たぐいまれな悲劇が起きてしまった。また、香央神酒が妻を制することができなかったため、御釜祓いの凶兆が実現してしまったのである。

### 3. 物語を不安定にする「磯良」という名前

前節で取り出した語りが直接的に提示する物語を不安定にするのは、妻の「磯良」という名前である。磯良は海の神に由来する名前である(清田 1970)。不安定になる理由は、この神の外見がきわめて醜いものとされているからである。読者は新妻が美人だという情報を与えられていたのに、名前からは醜いという矛盾する情報を与えられ困惑してしまう(田中 2002、岡田 2008)。この情報をきっかけに、読者は語りが直接的に提示する物語を素直に受け入れられなくなってしまうわけである。

海の神である磯良は、古代、神功皇后が朝鮮半島に侵攻し、新羅あるいは三韓を征伐したという伝説に登場する。中世以降に文献に現れ始めるが、例えば『太平記』卷三十九「神功皇后攻<sub>メ</sub>新羅<sub>フ</sub>給事」によれば、新羅出兵について

の軍評定のために、日本のすべての神々を常陸の鹿嶋に呼んだところ、磯良のみが現れなかった。そこで磯良を引き出すために、神々は燎火を焼き、神楽を催し、さまざまな歌を歌ったところ、神々の前に次のような姿で現れたという。

磯良感二堪兼テ、神遊ノ庭ニゾ参タル。其  
 貌ヲ御覧ズルニ、細螺・石花貝・藻ニ棲  
 虫、手足五体ニ取付テ、更ニ人ノ形ニテハ  
 無リケリ。神達怪ミ御覧ジテ、「何故懸ル  
 貌ニハ成ケルゾ。」ト御尋有ケレバ、磯良  
 答テ曰ク、「我滄海ノ鱗ニ交テ、是ヲ利セ  
 ン為ニ、久ク海底ニ住侍リヌル間、此貌ニ  
 成テ候也。浩ル形ニテ無止事御神前ニ  
 参ランズル辱シサニ、今マデハ参リ兼テ候  
 ツルヲ、曳々融々タル律雅ノ御声ニ、恥ヲ  
 モ忘レ身ヲ不顧シテ参リタリ。」トゾ答  
 申ケル<sup>4</sup>。

ここで注意しておきたいのは、磯良の外見が貝殻や海藻が体中につき「人ノ形」ではなかったという点と磯良自身が自分の外見を恥じているという点である。だから最初の招請に応じなかったのである。こうした神話は中世では『八幡愚童訓』『塵添堪囊抄』に見られ、江戸時代になると『本朝神社考』などに取り上げられている（清田1970、浅野1985）。それらの文献でも、磯良は貝殻などが体中についた醜い外見で、自分の外見を恥じているという情報が見られ、『雨月物語』が刊行された時期にも受け継がれていく。

『太平記』や『八幡愚童訓』などの神話に描かれる視覚的なイメージが後世の人々の想像力を刺戟したらしく、海神磯良は視覚表象として江戸時代の文化に登場する。見世物と祇園御霊会の船鉦である。

江戸時代には娯楽として見世物が盛んであったが、元禄末年ごろに磯良が見世物になった。

まず元禄14年（1701）の春に大坂で磯良が見世物になった。その後、正確な時期はわからないが、元禄末から宝永初年ごろに、江戸の堺町でも同様の見世物があった。この時期の見世物については、延享年間の随筆『諸聞集』に「元禄、イソラト云見セモノ出ル、是ハ惣身ニ蠣殻取ツキタル人ナリ、見物ノ諸人、竹ノサ、ラヲ以テ、コソゲテ見ルナリ、作り物」と記録されているという（三田村1975：304）<sup>5</sup>。

このときの見世物は話題になったらしく、浮世草子にとりあげられているのが三例報告されている<sup>6</sup>。まず江戸堺町の見世物を伝える『千尋日本織』（宝永4年（1707）刊）巻五「欲に身を巻藤の青龍」の記述を見てみよう。

此ほど奥笈よりいてたるとて、堺町に見せける大ていなる男、惣身にひしとうろこありて、ところ／＼に色／＼の貝どもとりつき目鼻も見へず、編木にてなづればから／＼と音なり、磯良とよぶもたいなき名をつけける。あまり見ぐるしき故、その比児わらべの誓言に入て、いそらの身になることもあれなどいゝあへり。あさましき事にこそ<sup>7</sup>。

磯良という名前で見世物に出された男について紹介されているが神話とそっくりな外見をしていたようである。引用部分のあとの記述によれ

5 元禄末期ごろ以外では、享保16年（1731）3月1日から4日にかけて、北野天満宮境内の下之森で「九羽八景」に「いそらのしんからくり」と「布さらしからくり」を加えた見世物が行われたことがわかっている（北野天満宮1984：556-57）。この見世物については、「九州八景」は「かなり大きいからくり仕掛け」で「いそらのしんからくり」は「人形の動くからくり」だろうと推測されていて（宗政1977：206）、元禄末年ごろの見世物とは異なる趣向のようである。

6 『けいせい色三味線』『千尋日本織』に磯良が見られることについては朝倉（1928）、三田村（1975）が紹介している。ただし朝倉は『千尋日本織』については書名を挙げずに、記述内容を紹介するだけである。また『傾国乱髪』の磯良の例は、長谷川（1960）が指摘している。

7 『千尋日本織』は早稲田大学古典籍総合データベースから引用した。

4 『太平記』は後藤・岡見（1962）から引用した。



ば、この男はもともと亀戸天神の門前の法印であったが、社内の池で鯉・鮒・泥亀を盗んでいたところ、池の龍に巻きつかれ、息を吹き返したときには、このような醜い姿になってしまったという。子供の誓言は現在であれば「指切りげんまん嘘ついたら針千本飲ます」というところだろうが、そこに磯良が出てくるということは、磯良の見世物がよく知られ視覚的に強い印象を与えていたことを示している。

以下に引用する浮世草子にはあからさまに性的な表現が見られる箇所がある。不快に感じられそうな方は次の二例は飛ばしていただければ幸いである。

以下の二例は見世物の演目ではない人物が磯良と呼ばれている例である。まず『傾国乱髪』（元禄末刊）下「傾城七色庚申侍」の例から見ていく。当時、遊女が磯良と呼ばれていたらしく、磯良の利都がその由来を語っているところである。

此比揚や座敷より女郎を磯等とゆひ出した  
り。是は下心むつかし。神代に鹿嶋の神は  
海中に住給ひて御身に色々の貝取付ば、い  
そら大明神といふ。此春いづちの海辺より  
来りしやら、難波道とん堀へ身中に貝取付  
たるやせ男出、かの神の名をかりいそらと  
いふて大坂町中の見物に付、それより女郎  
にも貝か付て居といふ心で磯等と異名を付  
たれば、女郎にかざらぬ事なればおかしか  
らず<sup>8</sup>。

遊女が磯良と呼ばれているのは貝殻からの連想で、見世物に出てくる男の貝殻が強い印象を与えていたことがわかる。遊女一般の呼称であり、特定の個人をあらわしているわけではないものの、管見の及んだ限りでは「吉備津の釜」を除けば女性が磯良と呼ばれている唯一の例である。

次は江島其磧『けいせい色三味線』（元禄15年（1702）刊）大坂之巻第二「梅よりすいたおきの荻野が一風」の例である。さきほどの例では遊女一般が磯良と呼ばれていたが、神話や見世物の磯良と容姿が似ているからそう名づけられたというわけではなかった。それに対しこちらは具体的な一人の男性が見世物の男に似ていることから磯良と呼ばれている例である。

爰に天満に銀で自由自在に天神をまはす男  
有けり。むまれつきふつゝ、かなる上に、近  
い比楊梅瘡の出た跡一めんにくへて、面は  
一皮むいたやうになつて雲紙を見るにひと  
しく、浜芝居の見世物に出しさふな男と人  
皆「磯螺大臣」と申あへり。是をよい事  
と心へ、伽羅之助といふ替名をやめて、  
「いそら」と申せば喜悦いたしぬ。ある時  
酒染て末社共、よい機嫌のあまりに、屏風  
をかこいて、其内へ旦那をおしこめ、いづ  
れも屏風の口に立て、「さあ／＼今度海  
中で仕過しいたし、竜宮城を夜ぬけにし  
て、始て此里へ出現いたした、磯螺と申島  
もの。毎日かるもといへる女郎を三づゝく  
ふて命をつなぐ稀ものの生捕。銭は戻りじ  
や、さあ太夫さま方、奥は広い」とわめけ  
ば、「鹿相いふな。女郎さま方に、奥のひ  
ろいは指合じや」と、座中どつといふて大  
笑ひ。皆する程の事大臣をつかふて、太  
鼓共が慰、「是から磯螺に裸で餓鬼踊所  
望」と申出せば、「酒が過たにゆるせ」と  
いふを、「不仕付な」と叱。ぜひなく大臣  
裸になつて、餓鬼踊をいたせば、「旦那踊  
の出来た祝に一角づゝいたさふ」と申せ  
ば、「踊は何べんでもいたさふが是はゆる  
せ」と手をあはすを、「太夫さまのござる  
前で、ひけて見ゆる」とほやけば、せんか  
たなくて親の借錢なす様に、不請不請に一  
角づゝとらしける。是はどうらはらなる事  
はあらじ。たとへば妾に内儀の機嫌取て

8 『傾国乱髪』は電子版霞亭文庫から引用した。

給仕して食くはさるゝに似り<sup>9</sup>。

磯良の見世物がどのように受容されていたのかを具体的に伝えている例なので、長めに引用を行った。遊郭の客であるこの男性は、不細工な顔立ちと梅毒感染による皮膚の状態から磯良と呼ばれている。

この『色三味線』の例は江戸時代の読者にとって印象深いものだったようで、「近年にない図」と評されたという(長谷川 1991:74)。『色三味線』を愛読していた柳沢淇園もそうした一人だったと考えられる。彼は『ひとりね』下・九八(1724年ごろ成立)で「世に風雅をしらぬ人」すなわち「うか／＼と夢見ると、雪隠へ行と、物くふ事ばかり覚へて」、その他は酒も博打も女もやらない男について、次のように表現している。

「…」髭は周茂叔見る如くむさくさはへても、それをひげぬき鏡に向ひてつくりなをすといふ事もしらず。髪は油といふもの<sup>アタマ</sup>のつけず、神功皇后の三韓を退治し給ひたる折ふし、罷出しそらとやらんいふものの如くそゝくれども、禮娘のふりかへりて<sup>タウセイムスメ</sup>笑ふかといふ気づかひもなし。口は宇婆掬多尊者を見るにひとしく、兼安祐元が一包も、齒といふものにあてねば、なれ過たる鮓を見るが如く、さりとてはかゝる色しらずにて、諸白髪に成るまでつれそふ女の心がしりたし<sup>10</sup> […]」

まったく身づくろいをせず、人の目を気にしないで不潔なままにしておく男性が磯良と呼ばれている。こういった視覚だけに焦点を当てた比喩は、神話からの直接的な連想というよりは、浮世草子からの影響が強いと考えられる。

見世物の磯良ほど視覚的に強い印象を与えるものではないが、もう一つだけ江戸期の視覚表

象の例を挙げておこう。現在、祇園祭の山鉾の一つに船鉾があるが、船鉾は神宮皇后の三韓征伐を表現したもので、そこに磯良の像も置かれていることが知られている(浅野 1985)。江戸時代にも現代と同じように船鉾に磯良の像が置かれていたようで、俳諧の世界でとりあげられている。

俳諧では祇園御霊会の船鉾は夏の季語であり、歳時記にも江戸期を通じて載せられていることばである(尾形・小林 1981、尾形・小林 1984)。このうち船鉾の磯良について解説している例が北村季吟編『増山井』(寛文3年(1663)刊)に見られる。

舟はこ 神功皇后に磯良、干珠満珠をたてまつりて三韓を討したかへたまふていなり<sup>11</sup>。

(増山井・四季之詞上・夏)

実際に船鉾の磯良をとりあげた句も北村季吟撰『新続犬筑波集』(万治3年(1660)序)に見られる。

船ほこはやまのあとへの磯良かな 僧泰圓<sup>12</sup>(新続犬筑波集・巻15・夏発句下・3917)

また、船鉾の磯良を一つの句のなかで扱っているわけではないものの、連句のなかで磯良の句のあとに船鉾の句が置かれ、磯良と船鉾が結びつけられている例もある。松永貞徳の『紅梅千句』(明暦元年(1655)刊)に見られる例である。

恋慕ゆへ伊勢<sup>レンボ</sup>の住居<sup>すまひ</sup>を立出て 政信<sup>たちいで</sup>  
(紅梅千句・第7・653)

いそらがこころ皇后<sup>くわうこう</sup>に見ゆ 長頭丸  
(紅梅千句・第7・654)

舟鉾<sup>フネボコ</sup>やめでたき例にひきぬらん 可頼  
(紅梅千句・第7・665)

9 『けいせい色三味線』からの引用は長谷川(1989)によった。

10 『ひとりね』からの引用は中村(1965)によった。

11 『続山井』は古典俳文学大系から引用した。この論文では特に断らないかぎり、俳諧関係のテキストについては古典俳文学大系から引用している。

12 『新続犬筑波集』は赤羽(1995)から引用した。

磯良が出てくる俳諧のテキストを三例見てきた。これらの例からわかるように、船鉾の磯良は江戸期の人々に磯良の視覚的印象をたしかに提供していたといえる<sup>13</sup>。

#### 4. 結び

この論文では「吉備津の釜」には二つの物語が見られることを明らかにするために必要な基礎的作業を二つ行うことができた。まず語りが直接的に提示する物語をとりだすことができたので、もう一つの物語との関係を論じることができるようになった。さらに磯良という名前が強い視覚的な印象を読者に与えるものであったことが示せたので、磯良という名前がもたらす両義性について具体的に論じることができるようになった。この二点を踏まえて、「吉備津の釜」に見られる二つの物語について論じていくことにしたい。

#### 引用文献

- 赤羽学（編）（1995）『新続犬筑波集』（岡山大学国文学資料叢書4）ベネッセコーポレーション。  
 朝倉無声（1928）『見世物研究』春陽堂。  
 浅野三平（1985）『上田秋成の研究』桜楓社。  
 阿部倬也（編）（1995）『洗濯物・洗濯碇』（古典文庫591）古典文庫。  
 岡田袈裟男（2008）「「吉備津の釜」に現われた欲望の「かげ」と身体性」近藤信義（編）『修辞論』（pp.263-72）おうふう。

13 上記のほかに、海の神である磯良をとりあげた俳諧の例で、管見に及んだのは次の二つの発句である。『俳諧洗濯物』は阿部（1995）から引用した。前者は海の神という磯良の属性に、後者は磯良が龍宮から干珠・満珠を持ってきたという神話の一場面に、それぞれ焦点が当てられている。

風の神いそらにかはれ花の時 一雪（俳諧洗濯物・423）  
 露の玉持（もち）ていそらや翁草 勢州津 不尤（続山井・秋之発句上・4362）

- 尾形仿・小林祥次郎（編）（1981）『近世前期歳時記十三種本文集成並びに総合索引』勉誠社。  
 尾形仿・小林祥次郎（1984）『近世後期歳時記一本文集成並びに総合索引』勉誠社。  
 風間誠史（2011）『春雨物語という思想』森話社。  
 北野天満宮史料刊行会（編）（1984）『北野天満宮史料一目代記録』北野天満宮。  
 木越治（1998）「Long Distant Call—深層の磯良、表層の正太郎」『富士フェニックス論叢』中村博保教授追悼特別号，273-85。  
 清田啓子（1970）「「吉備津の釜」の磯良—命名についての報告」『駒澤大学文学部研究紀要』28，35-45。  
 後藤丹治・岡見正雄（校注）（1962）『太平記』3（日本古典文学大系36）岩波書店。  
 田口卓臣（2014）「古典を読み、ここにいない人とともに考える—鴨長明『方丈記』について」『宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター年報』6，5-9。  
 田中厚一（2002）『雨月物語の表現』（研究叢書285）和泉書院。  
 中村幸彦ほか（校注）（1965）『近世随想集』（日本古典文学大系96）岩波書店。  
 中村幸彦ほか（編）（1990）『上田秋成全集』7（小説篇1）中央公論社。  
 長谷川強（1969）『浮世草子の研究—八文字屋本を中心とする』桜楓社。  
 長谷川強（1991）『浮世草子新考』汲古書院。  
 長谷川強（校注）（1989）『けいせい色三味線・けいせい伝受紙子・世間娘気質』（新日本古典文学大系78）岩波書店。  
 三田村鳶魚（1975）『三田村鳶魚全集』14，中央公論社。  
 宗政五十緒（1977）「江戸時代中期の北野天満宮目代日記に見えたる芸能興行史料」『芸能史研究』58，47-56。

古典俳文学大系（日本文学Web図書館 和歌&俳  
諧ライブラリー）.

電子版霞亭文庫[http://kateibunko.dl.itc.u-tokyo.  
ac.jp](http://kateibunko.dl.itc.u-tokyo.ac.jp)（2014年12月25日閲覧）.

早稲田大学古典籍総合データベース[http://www.  
wul.waseda.ac.jp/kotenseki/](http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/)（2014年12月25日閱  
覧）.